

篠路歌舞伎のれきし



大雪やきびしい寒さなどのかんきょうで篠路村が開拓される中、明治31年(1898年)、わかい人たちが『若連中』という会をつくり、明治35年(1902年)、烈々布神社のお祭りの時に『篠路村烈々布素人芝居』を行ないました。

これがのちに『篠路歌舞伎』といわれるようになりました。

『篠路歌舞伎』ができたことによって、村人たちの地いきに対する思いが強くなり、さらに村を発展させていきました。

神社の祭りで芝居かあ
粹じゃねーか！



大沼三四郎(一番左)



昔の篠路歌舞伎の様子

この時、歌舞伎を教えていたのが大沼三四郎です。大沼三四郎は、この地いきの人に本かくてきな歌舞伎を見せてあげたいという強い思いをもっていました。



あつい男はきらい
じゃないな！！



『若連中』と大沼三四郎のあつい思いが実り、他の村からも歌舞伎を見に来る人々が集まって、歌舞伎はますますさかんになりました。大正時代には、他の村の青年たちも座員にくわり、座員が50人にもなるなど大きな盛り上がりを見せました。



※祭典奉納とは？
神社で行なわれるお祭りの時に
神様にささげられた芸能など



引退興行の一場面

『素人芝居』は、※祭典奉納と地いきの人を楽しませる行事として親しまれていました。しかし、国鉄札沼線(今のJR 学園都市線)の開通によって、楽しみの中心が札幌にうつり、人々が札幌に集まるようになったことで、昭和9年(1934年)に活動を終えました。

歌舞伎 豆ちひさ

「勧進帳」ってどんなお話？

有名な『弁慶』と『義経』がでてきます。源義経と頼朝の兄弟ゲンカのスエ、義経は命をねられます。

そこで弁慶たち家来は修行僧、義経は荷物持ちに化け、兄からにげようしますが、関所で正体が見やぶられました。

弁慶は、そのうたがいを晴らすため、主人である義経を持っていた棒でたたきました。関所の人は、弁慶の主人を守ろうとする気持ちに感動し関所を通してあげたお話です。



主人である義経をたたく
とは、思い切ったことを
しやがる・・・